和田芳恵著作年表

青木一男

はじめに

1

和田芳恵は、明治三十九年（一九〇六）三月三十日（戸籍上は四月六日）、北海道胆振国山越郡長万部村（現、長万部町）字国縫三六八番地の一一で生まれた。本名も芳恵。父伊太郎、母リエの四男。八人兄弟であった。家では、鉱山に働く鉱夫や運搬の馬車ひき、トロッコの人夫、農漁業に従事する人たちを相手に生活必需品や食料品を扱う和田商店を経営していた。大正六年（一九一七）、父が有志と交立会という消費組合を運営していたが、組合費の使い込み事件で、会長だった父が出奔し、芳恵は新聞配達をして家計を助けつつ小学校を卒業した。大正八年三月、国縫小学校を卒業し、四月に庁立函館商船学校航海科に入学する。翌年二月、スペイン風邪にかかる。三月、期末試験後家族のいる土別へ行く。当時、一家は破産して村を捨てていたのである。芳恵はスペイン風邪から腹膜炎になり、医師から絶望を宣告されたていた。父が札幌で就職することになり、一家をあげて転任。六月ごろ、再起の感触がもてた。大正十年（一九二一）四月、私立北海中学校の二年に編入学する。大正十一年七月から郷里の国縫尋常小学校の代用教員となり家計を助ける。翌年、担任教師や親しい友人の運動で期末試験だけ受けて四年に進級できた。また、佐藤正男の育英資金を夏から受けられるようになった。大正十三年三月、四年修了で北海中学を退学。四月上京、佐藤家に住み込み、子供の家庭教師をしながら神田の研数学館へ通う。大正十四年四月、中央大学法学部予科に入学。昭和三年（一九二八）三月、法学部に進む。昭和六年三月、大学卒業。同年五月ごろ、石川達三の叔父石川六郎（当時、朝日新聞

社文芸部長）の推薦で新潮社に入社し、『日本文学大辞典』編集部に配属する。昭和九年には大衆雑誌『日の出』編集部に転属、同十二年には同誌編集長となる。昭和十六年八月、退社を申し出る。以後、文筆生活に入る。昭和五十二年十月五日、十二指腸潰瘍のため死去する。

2

㋐ 本年表は、和田芳恵の著作を発表年月順に配列したものである。

㋑ 単行本は二重かぎ（『　』）で示し、雑誌・新聞等に発表した著作は一重かぎ（「　」）で示した。

㋒ 単行本については発行所名、雑誌等に発表した場合は誌名を示し、あえて発行所名は略した。

㋓ 文庫本の場合は、「〇〇文庫」のように示し、発行所名は略した。

㋔ 和田芳恵の著作について通覧できる年譜・書誌としては、左記のものがある。本年表を作成するに際して多大の恩恵にあずかった。明記して謝意を表したい。

和田芳恵年譜（『和田芳恵全集・第五巻』所収）保昌正夫編　「和田芳恵」書誌（『かたりべ叢書15　和田芳恵Ⅱ』所収）宮本瑞夫編

3

本年表では、諸資料から和田芳恵の著述と知り得るものでも、発行月（新聞では発行日）が確認できないため、あるいは発行所が不明であったため収載できなかったものもある。私の調査が不十分で収載漏れのものも多いと思う。諸賢のご叱正を賜りたいと切望している。

著作年表

〔大正十三年・一九二三年〕　十七歳

同人雑誌『クロバア』を同級生と発行。滅びゆくアイヌを主題にした戯曲を書く。（北海中学校四年生）

〔昭和三年・一九二八年〕　二十二歳

『中大新報』を独力発行しようとする上級生のため文芸面で協力する。（中央大学法学部一年）

〔昭和四年・一九二九年〕　二十三歳

八月　短歌「ひからびた川」（級友平松太郎らとの同人雑誌『新古典

派』創刊号）発表。
十月　短歌「屠殺場」（『新古典派』二号）発表。
〔**昭和十五年・一九四〇年**〕　三十四歳
六月　「樋口一葉」（『三田文学』、六月より連載を始める。六、七、八、九、十、十二月号、十六年一、二、三、四、六、七、八月号まで十三回。）
〔**昭和十六年・一九四一年**〕　三十五歳
四月「格闘」（同人雑誌『山』創刊号）発表。同作品が昭和十六年上半期芥川賞候補作品のリストに載る。
発表月末詳「水葬（鮎）」（『山』）発表。
九月「『樋口一葉』雑感」（『三田文学』）発表。
十月「樋口一葉』十字屋書店刊。（『三田文学』発表の「樋口一葉」と「あとがき」（「『樋口一葉』雑感」）を所収。
〈口絵＝鏑木清方、本扉＝伊東深水、中扉＝岩田専太郎・清水三重三・田代光〉
十一月「祝煙」（―長篇「雑誌機構」の中―『三田文学』）発表。
〔**昭和十七年・一九四二年**〕　三十六歳
三月「絵物語『樋口一葉』」（『日本少女』創刊号）発表。
四月『樋口一葉研究』（編著・『樋口一葉全集』別巻）新世社刊。
五月『作家達』（連作短篇小説）泰光堂刊。
（所収作品）水葬　無名　格闘　悲愁　草話　余白　祝煙　転心
〈装幀＝熊谷公〉
七月「三代名作全集『樋口一葉集』解説」（河出書房）
九月『十和田湖』泰光堂刊。
〈装幀＝斎藤清〉
九月「樋口一葉の新資料」（『三田文学』）発表。
十四月「未定稿『にごりえ』の発見と研究」（三田文学』）発表。
〔**昭和十八年・一九四三年**〕　三十七歳
一月「解説への序章」（『一葉に与へた手紙』・今日の問題社刊・所収）発表。
二月「広津柳浪」（『現代文学』）発表。
九月『樋口一葉の日記』今日の問題社刊。
〈序文＝川端康成・小島政二郎・林芙美子〉
十一月『離愁記』（書きおろし長篇小説・新鋭文学選集10）今日の問題社刊。
十三月「日本文学の伝統」（『現代文学』）発表。
〔**昭和十九年・一九四四年**〕　三十八歳
太平洋戦争の戦局は不利となり、創作活動も困難となる。軍需工場の文学活動に出席したり、千葉地区司令部の宣伝活動にも従う。
〔**昭和二十年・一九四五年**〕　三十九歳
昭和十九年から南方の宣撫工作にあたるための訓練を受け、この年の二月に大東亜省より渡航許可もおりていたが、飛行機は飛べない状況であった。その後、東北地方の鉱山の慰問に行く。六

月、土方兵として茨城県石岡の北方で石油タンク貯蔵の壕掘りをする。八月、終戦。

〔昭和二十一年・一九四六年〕　四十歳

神田で兄の経営する英語通信社の編集を手伝うかたわら、兄の出資で筑波書房を設立したが、一冊も出版しないで倒産。

六月　樋口一葉著『歌集恋の歌』（紅書房刊）の校訂・あとがき

〔昭和二十二年・一九四七年〕　四十一歳

五月　雑誌『日本小説』（大地書房）創刊。編集意図が認められて、いわゆる中間小説雑誌の嚆矢となった（「自作年譜」による）。

七月『一葉の日記』（『樋口一葉の日記』の再刊）隅田書房刊。

〔昭和二十三年・一九四八年〕　四十二歳

大地書房（編集局長）を退職。独立して日本小説社を興こし、『日本小説』を発行し続ける。

〔昭和二十四年・一九四九年〕　四十三歳

四月『日本小説』終刊。

「捨て場所」（『若草』）発表。ペンネームは中川周吉。

十月、日本小説社倒産。莫大な負債をかかえて、高利貸の眼から逃れるため潜行生活に入る。東玉川の貸間に住む。

〔昭和二十六年・一九五一年〕　四十五歳

十二月「暗い血」（『三田文学』）発表。

〔昭和二十七年・一九五二年〕　四十六歳

六月、麻布森元町に転居。文筆活動にもどる。

六月「露草」『三田文学』発表。二十七年度上半期直木賞候補にあげられる。

○この年、筑摩書房の土井一正編集長が『一葉全集』編纂依頼に来訪。

〔昭和二十八年・一九五三年〕　四十七歳

四月・五月「塵の中」（『三田文学』）発表。二十八年度上半期直木賞候補にあげられる。

七月一日「秋声と代作」（『図書新聞』）発表。

八月『一葉全集・第三巻』（塩田良平と共編・以下同じ）筑摩書房刊。

九月『一葉全集・第二巻』（共編）筑摩書房刊。

十一月『一葉全集・第六巻』（共編）筑摩書房刊。

十二月十四日「かのぬし羨れ候」（「読売新聞」）発表。

十二月「老猿」（後に「強い女」と改題。『三田文学』）発表。

〔昭和二十九年・一九五四年〕　四十八歳

三月『一葉全集・第四巻』（共編）筑摩書房刊。

「『甲陽新報』の経づくゑ」（『一葉全集月報』）発表。

四月「一葉と母の香典帳」（『文学』）発表。

五月　池田岬・宇留野元一・小松伸六・榛葉英治・杉森久英・竹内良一・緑川貢・渡辺喜恵子らと『下界』を発刊。編集発行人となる。

六月『一葉全集・第一巻』（共編）筑摩書房刊。

七月『一時間文庫・樋口一葉』新潮社刊。

九月『日本文学アルバム3・樋口一葉』（編集）筑摩書房刊。
十月「消え残る色気――『一葉日記』に出てくるおぶんとの対面記」（『新文明』）発表。
十一月二十五日「奇蹟の期間―著者『樋口一葉』をめぐって」（『北陸新聞』）発表。
十一月二十五日「甲府の一葉展」（『東京新聞』）発表。
十二月「愛の歪み」（『下界』）発表。
「日本歴史に残る女性　樋口一葉の巻」（『女学生の友』）発表。
『世界伝記全集9　樋口一葉』講談社刊。
○発表月未詳「一度だけの名」（共同通信）

〔昭和三十年・一九五五年〕

一月『一葉全集・第五巻』（共編）筑摩書房刊。
「（座談会）樋口一葉を語る」（上野晴朗・石原文雄と『新文明』）
「一葉と新年」（山梨県連合婦人会会報）
四月「一葉の姉」（『三田文学』）発表。
「清遊」（『桃李』）発表。
「樋口一葉」（『教育技術・中学国語』）発表。
六月～十月「一葉伝』序説」（『新文明』）発表。
九月「伊勢久のお千代」（『桃李』）発表。
九月五日・十五日「たけくらべ――名作タイトル物語」（『読書タイムズ』）発表。
十一月「樋口一葉論」（『現代作家論叢書・明治の作家たちI』英宝社刊・所収）発表。
「一葉の父と芝権現の神主」（『英宝社月報16』）発表。
十一月二十一日「樋口一葉について」（『読売新聞』）発表。

〔昭和三十一年・一九五六年〕　五十歳

一月一日「渋い個性美の一葉　女流作家のきもの（上）」（後に「一葉のきもの」と改題。『東京服飾新聞』）発表。
四月「『たけくらべ』の背景」（『あさくさ』）発表。
「一葉家系考」（『明治大正文学研究19』）発表。
六月『一葉の日記』筑摩書房刊。（昭和三十一年度日本芸術院賞受賞）
『一葉全集・第七巻』〈補遺・研究・資料〉（共編著）筑摩書房刊。
八月「一葉の碑」（『ブックス』）発表。
「小島政二郎著『眼中の人』解説」。（角川文庫）
九月『日本文学アルバム20・林芙美子』（編集）筑摩書房刊。
十月「『北村透谷・樋口一葉』年譜」（『現代日本文学全集4・筑摩書房刊・所収）
『一葉青春日記』（編・解説）角川文庫。
十一月『一葉恋愛日記』（編・解説）角川文庫。
「樋口一葉と『にごりえ』（『大歌舞伎』）発表。
十一月二十二日「一葉忌　彼女は今も生きている」（『朝日新聞』）発表。

〔昭和三十二年・一九五七年〕　五十一歳

二月『名作のできるまで――作品研究ノート』北辰堂刊。

〈写真＝榊原和夫〉
三月六日「芸術院賞を受けて」（『朝日新聞』）発表。
三月二十五日『『たけくらべ』と『流れる』』（『東京新聞』）発表。
四月十五日「一葉研究こぼれ話」（『日本古書通信』）発表。
五月「一葉研究雑感」（『中央評論』）発表。
「一葉とともに」（『キング』）発表。
六月十四日『『樋口一葉展』と資料」（『毎日新聞』）発表。
七月「たけくらべ』の成立過程」（『国文学・解釈と鑑賞』）発表。
「『たけくらべ』樋口一葉」（関良一と分担執筆、和田は鑑賞。『国文学・解釈と鑑賞』　当月より昭和三十三年十二月まで）発表。
『樋口一葉』刊。（『一時間文庫・樋口一葉』に「一葉と母と香典帳」「一葉家系考」を加えたもの。角川文庫）
八月「樋口一葉『にごりえ』『たけくらべ』」（『多喜二と百合子』）発表。
十一月「一葉の日記と書簡」（『国文学―解釈と教材の研究』）発表。
「一葉作品の演劇・映画化」（同右）
十四月「『しり』と『ひり』」（『言語生活』）発表。

〔昭和三十三年・一九五八年〕　五十二歳

一月「私の貧乏物語」（『婦人生活』）発表。
五月『女性のための名作・人生案内』創思社刊。
〈表紙画＝中村直人　カット＝大沢千郎〉
十月『おもかげの人々――名作のモデルを訪ねて』講談社刊。
〈装幀＝久保守。写真＝大竹新助〉
十一月『近代文学鑑賞講座3・樋口一葉』（編著）角川書店刊。
『樋口一葉読本』（編著）学習研究社刊。
十二月「主として直木賞のこと」（『風信』）発表。
「『蒲団』と『新生』のモデルに会って」（『光塩』）発表。
「私の読書歴」（『中央評論』）発表。

〔昭和三十四年・一九五九年〕　五十三歳

二月「一葉の仕事部屋」（『みどり』）発表。
五月「座談会『文学界』から『明星』へ」（柳田泉・勝本清一郎と。『文学』）
十月「一葉姉妹」（『労働文化』）発表。
十一月「『新選女流俳人叢書1　池上不二子集』解説」（近藤書店刊）
「海音寺潮五郎著『茶道太平記』解説」（新潮文庫）

〔昭和三十五年・一九六〇年〕　五十四歳

二月「表面は女性だけの手で」（『文学碑めぐり』所収）発表。
六月『樋口一葉伝―一葉の日記』新潮文庫。
〈解説＝山本健吉〉
七月「西伊豆」（『伊豆』）発表。
九月「江戸生艶気樺焼」「遊子方言」「通言総籬」訳（『古典日本文学全集18・江戸小説集〈上〉』筑摩書房刊・所収）
「私の中学時代」（『中央評論』）

十月「東北の旅」（『世界の旅日本の旅』）発表。

〔昭和三十六年・一九六一〕　五十五歳

春、大田区上池台一〇二四（現、一丁目二十九番八号）に転居。

三月「素顔の一葉」（『くうりえ』）発表。

「一葉の母の幼名―弘化人別帳発見からの考察―」（『文学散歩』）発表。

四月「ふたつの一葉像」（『萠春』）発表。

五月「徳田秋声1」（『人と作品　現代文学講座4集・明治編4』明治書院刊・所収）発表。

六月「『文学界』から『明星』へ」（『座談会明治文学史』岩波書店刊・所収）

九月「『にごりえ・たけくらべ』解説」（岩波文庫）

十月「政治的な青春期」（『円卓』）発表。

〔昭和三十七年・一九六二年〕　五十六歳

四月「徳田秋声2」（『人と作品　現代文学講座9集・昭和編2・明治書院刊・所収）発表。

七月「武林無想庵先生訪問記」（『武林無想庵追悼録』無想庵の会刊・所収）発表。

「渡島半島」（井上靖編『半島』・有紀書房刊・所収）

九月「秋声入門」（『日本現代文学全集28　講談社刊・所収）発表。

九月二十九日～十一月二十四日「文芸時評」（『図書新聞』）連載発表。

十一月「樋口一葉入門」（『日本現代文学全集10　樋口一葉集・付明治女流文学』講談社刊・所収）発表。

「明治女流文学」（同右）

〔昭和三十八年・一九六三年〕　五十七歳

一月「伊豆の長八」（『塗装技術』）発表。

三月「現代女子学生気質」（『宝島』）発表。

五月『愛の民話』講談社刊。

「一葉を和歌へ導いた人」（『日本文学全集3』付録　新潮社刊・所収）発表。

十一月『塵の中』（短篇小説集）光風社刊。

〈所収作品〉道祖神幕　暗い血　強い女　塵の中

〈装幀＝関野準一郎〉

〔昭和三十九年・一九六四年〕　五十八歳

一月　短篇小説集『塵の中』で昭和三十八年下半期直木賞を受賞。

二月～十二月「かくれた庶民像」（『月刊東海テレビ』）連載発表。

三月「晩年の樋口一葉」（『人間の科学』）発表。

「昔のもの知り」（『日本古書通信』）発表。

「小説に描かれた旅情の土地」（『旅』）発表。

四月「塵の中」（『オール読物』）掲載。

「金から女へ」（『海外旅行手帖』）発表。

五月「島木健作と私」（『中央公論』）発表。

六月「銀座夜話」（『銀座百点』一一四号）発表。

「理想に燃える」（『中央大学新聞』）発表。

「まごころの味」（『漫画読本』）発表。
『樋口一葉の人と作品』（編著）学習研究社刊。
七月「林芙美子の一面」（『文芸広場』）発表。
「狂い咲き」（『オール読物』）発表。
「二代つづいた女の戦い」（『婦人生活』）発表。
「東京の古さ新しさ」（『東京と京都』）発表。
「小説の中の湯ヶ島」（『温泉』）発表。
八月「金魚と札束」（『小説新潮』）発表。
「幻灯」（『新婦人』）発表。
「職人かたぎ」（『新潮』）発表。
八月二十三日「私がハッスルする時」（『読売新聞』）発表。
九月「紅葉と一葉」（『日本文学全集3・付録』新潮社刊・所収）発表。
「火の車」（『新潮』）発表。
七月「（対談）秋声を追って」（野口富士男と対談・『風景』所収）
十一月「藍染川と不忍池」（『うえの』）発表。
「私の『きゃんどる』」（『かんだ』）発表。
「一葉／テレカラフ／電話」（『ダイヤル』）発表。
十一月九日「秋声／困難なその特質の解明」（『週刊読書人』）発表。
十二月二十一日「職人の世界」（『中部日本新聞』）発表。
この年、日本文芸家協会理事となる。

〔昭和四十年・一九六五年〕　五十九歳

二月「冬の声」（『文芸』）発表。
「二着の背広」（『日本』）発表。
三月「きれいな嘘」（『小説現代』）発表。
「付録的な人間」（『宝島』）発表。
「人と文学—樋口一葉」（『現代日本文学大系3・月報』築摩書房刊・所収）発表。
三月二十二日「このごろ」（『朝日新聞』夕刊）発表。
四月「心の灯」（『灯』）発表。
「掌の恋」（『小説新潮』）発表。
「歴史の眼」（『歴史読本』）発表。
五月「ほんのちょっとしたこと」（『早稲田公論』）発表。
六月「一葉の俳句」（『馬酔木』）発表。
「責任」（『騒友』）発表。
九月「お人好し」（『文芸』）発表。
十月「遠い眺め」（『小説新潮』）発表。
「秋が立つ頃」（『新宿百選』）発表。
『現代の文学17　林芙美子集』解説」（河出書房刊・所収）
十一月二十三日「初公開される一葉の恋文」（『毎日新聞』）発表。
十二月「おまんが紅」（『小説現代』）発表。
「東京のそば・京都のそば」（『新そば』）発表。
「海音寺潮五郎著『王朝』解説」（角川書店刊）
「樋口一葉の文学」（『国文学』）発表。

〔昭和四十一年・一九六六年〕　六十歳

一月十七日～四月七日「ひとつの文壇史」（『東京新聞』夕刊）連載。
二月『塵の中』光風社刊。
〈装幀＝関野準一郎〉
四月「窮鳥」（『別冊小説新潮』）発表。
「私の念願」（『美世』）発表。
土浦短期大学国文科教授に就任。
五月「妖棋伝』の頃」（『角田喜久雄氏華甲記念文集』所収）発表。
六月「作家稼業」（『文学者』）発表。
七月「作家と作品」（『日本文学全集28　林芙美子集』集英社刊・所収）発表。
八月「海音寺潮五郎著『天と地と』解説」（角川文庫）
九月「円地文子と幸田文」（『日本現代文学全集96』講談社刊・所収）発表。
「『私の半生涯』（福田英子著）」訳（『『世界の人間像26』角川書店刊・所収）
「画室での話」（『くらしと保険』）発表。
十月「出版機構の中で」（『三田文学』）発表。
十二月「色合わせ」（『小説現代』）発表。

〔昭和四十二年・一九六七年〕　六十一歳

一月「海音寺潮五郎著『蒙古来たる』解説」（角川文庫）
「情の人吉川英治」（『吉川英治全集月報』講談社刊・所収）発表。
二月「明治のおしゃれ」（『アクセント』）発表。
三月「芙美子入門」（『日本現代文学全集78』講談社刊・所収）発表。
「平林たい子入門」（同右）
四月「ビヤボンと月は東に」（『音楽の友』）発表。
七月「『小島政二郎全集』解説」（鶴書房刊・所収）
「私の愛好品」（『あまから』）発表。
『みだれ髪』光風社書店刊。
〈カバー＝鷹山宇一　表紙・扉。さしえ＝三井永一〉
『ひとつの文壇史』新潮社刊。
八月「（対談）文壇昨日・今日」（巌谷大四氏と『風景』所収）
「盆踊りの思い出」（『浄土宗新聞』発表。
九月「記憶」（『新潮』異表。
十一月「忘れ得ぬ手紙」（『川口松太郎全集・月報』講談社刊・所収）
「現代女性気質」（『家族計画だより』）発表。
十二月「オガ」（『無限』）発表。

〔昭和四十三年・一九六八年〕　六十二歳

二月「日本短篇文学全集39　武田麟太郎・林芙美子・織田作之助』鑑賞」（筑摩書房刊・所収）
三月「『日本小説』創刊号編集後記」（昭和批評大系3』番町書房刊・所収）
四月十八日「林芙美子さんのこと」（『中日新聞』）発表。
五月「鯉のぼりと乱れ箱」（『楽しいわが家』）発表。

「写楽あれこれ」（『新潮』）発表。
七月『色合わせ』光風館書店刊。
（所収作品）掌の恋　冬の声　きれいな嘘　おまんが紅　色合わせ　遠い眺め　二着の背広　金色と札束　お人好し　窮鳥
七月十三日「一葉と青海学校」（『毎日新聞』）発表。
八月「山田美妙入門」「広津柳浪入門」「川上眉山入門」「小栗風葉入門」（『日本現代文学全集11』講談社刊・所収）発表。
「夜空の花火」（『東宝』）発表。
「風致区」（『風景』）発表。
九月「直木賞作家のころ」（『川口松太郎全集・月報』講談社刊・所収）
十月「水上勉」（『水上勉選集・月報』新潮社刊・所収）
十一月「暗い川」（『ポスト』）発表。
十二月「文壇昨日・今日―作家の対談」（巌谷大四と『文芸春秋』所収）
「『新編忠臣蔵』の頃」（『吉川英治全集・月報』講談社刊・所収）
「文学者の日記」（『新刊ニュース』）発表。

〔昭和四十四年・一九六九年〕　六十三歳

一月「蛍とぶ肌」（『小説エース』）発表。
「忘れがたい人　柴田宵曲」（『燕雀』）発表。
一月二十七日「お礼れ春永に」（『東京新聞』）異表。
三月『愛情の記録』（編）（『現代日本記録全集17』）筑摩書房刊。
「（対談）愛情三代」（渋沢秀雄と・同右）
「最初の東京の顔」（『うえの』）発表。
「眠っている古新聞」（『日本近代文学館ニュース』）発表。
四月『一葉誕生』現代書館刊。
「『日本短編文学全集7　樋口一葉・田村俊子・宇野千代・幸田文』鑑賞」（筑摩書房刊・所収）
「形の大きさ」（『早稲田文学』）発表。
五月「そんな形で」（『風景』）発表。
「出版雑誌界展望　一九六八」（『文芸年鑑』所収）発表。
「小さな窓から」（『今週の日本』）発表。
「私の文章修行」（『週刊言論』）発表。
六月「吉野秀雄の散文」（『吉野秀雄全集5　月報』筑摩書房刊・所収）
「寸描高見順と伊藤整」（『河出書房カラー版文学全集月報』所収）発表。
七月「あの人」（『別冊小説新潮』）発表。
「林芙美子の年譜」（『日本文学全集31』河出書房刊・所収）
「小さな足あと」（『山紫水明』）発表。
『愛の歪み』中央大学出版部刊。
（所収評論）

I

立志　一葉と母の香典帳　初公開きれる一葉の恋文　かのぬ

し羨れ候　一度だけの名　一葉の日記と書簡　一葉の碑　表面は女性の手だけで　『一葉伝序説』　一葉入門　紅葉と一葉　たけくらべの背景「たけくらべ」の成立過程　甲陽新報の『経づくゑ』「たけくらべ」と「流れる」　一葉を和歌へ導いた人　一葉の俳句　一葉／テレカラフ／電話　晩年の樋口一葉　一葉と青海学校　一葉の下着　明治のおしゃれ　素顔の一葉　ふたつの一葉像　一葉の仕事部屋　一葉の父と芝権現の神宮　政治的な青春期　一葉の姉　一葉姉妹　清遊　歴史のひとこま　伊勢久のお年代　消え残る色気　一葉研究こぼれ話　心の灯「しり」と「ひり」　お礼は春永に　一葉とともに　奇蹟の期間　樋口一葉について　一葉作品の演劇・映画化　「樋口一葉展」と資料　甲府の一葉展

II

秋声入門　秋声／困難なその特質解明　秋声と代作　林芙美子／複雑な出生の秘密も　林芙美子の一面　林芙美子さんのこと　芙美子入門　平林たい子　円地文子と幸田文　田村俊子と宇野千代　麟太郎と作之助　美妙・柳浪・眉山・風葉　明治女流文学

八月「作家子供」（『文学界』）発表。

九月「『林芙美子・放浪記』解題」（日本近代文学館『名著複刻全集近代文学作品解題―昭和期』所収）

「秋と女ごころ」（『資生堂チェインストア』）発表。

「寸描石川達三」（『新潮日本文学30　石川達三・月報』所収）

「ニシンを失った積丹」（『ワイドカラー日本・北海道編』所収）発表。

十月「幸田文入門」（『日本現代文学全集96　円地文子・幸田文集』講談社刊・所収）発表。

「作家の横顔」（『日本文学全集2　樋口一葉・国木田独歩』河出書房刊・所収）発表。

十一月「筆名考」（『新潮』）発表。

「人命尊重」（『素面』）発表。

十二月「鑑賞の小さな手引」（川端康成著『掌の小説』旺文社文庫・所収）

この年、日本文芸家協会債権委員会委員長に就任。

〔昭和四十五年・一九七〇年〕　六十四歳

一月「『日本短編文学全集23　菊池寛・山本有三・久米正雄・佐々木茂索・小島政二郎全集』鑑賞」（筑摩書房刊・所収）

「逢いびき」（『小説現代』）発表。

「一年の計」（『楽しいわが家』）発表。

「野にある花」（『ちくま』）発表。

二月「多力の人・如是閑翁」（『中央評論』）発表。

「深淵」の顛末（『高見順全集・月報1』勁草書房刊・所収）発表。

六月「ひなどり弁天」（『小説現代』）発表。

八月『私の内なる作家達』ＵＬ双書９　中央大学出版部刊。

（所収評論・随想）

1

作家子供　文芸春秋派の作家　絶筆・七時〇三分　情の人吉川英治　「新編忠臣蔵」の頃　吉野秀雄の散文　「深淵」の顚末　寸描・高見順と伊藤整　小島政二郎　直木賞作家のころ　寸描・石川達三　島木健作と私　水上勉　丸谷才一　永井路子　記憶　職人かたぎ　写楽あれこれ　霊彩の「風吹寒山図」　伊豆の長八オガ　職人の世界　忘れがたい人・柴田宵曲　昔のもの知り　画室での話　多力の人・如是閑翁

2

小説に描かれた母　〃女一代記もの〃をささえるもの　秋と女ごころ　女子学生とたばこ　現代女女学生気質　恐るべき若妻たち　現代女性気質　ビヤボンと月は東に　母の生き方　二代つづいた女の戦い　歴史の眼　私の貧乏物語　理想に燃える　芸術院賞を受けて　付録的な人間　『道祖神幕』余話　私の小説作法　暗い川　金から女へ　私の中学時代　私の読書歴　私の文章修業　作家稼業　小さな足あと　自分のこと　私の念願

3

うたかたの町　白山花街　藍染川と不忍池　銀座夜話　風致区　季節感のなくなった都　最初の東京の顔　東京の古さ新しさ　秋深き仁科峠　西伊豆　小説の中の湯ケ島　旅二題　東北の旅　札幌の夏　噴火湾の町々　ニシンを失った積丹　ふるさとを想う　小説に描かれた旅情の土地　「蒲団」と「新生」のモデルに会って

4

カストリ文化の再評価　ベスト・セラーに見る人間像　主として直木賞のこと　私の「きゃんどる」　秋風がたつ頃　文学者の日記　一年の計　筆名考　「社会と文学の歩み展」をみて　「近代文学名作展」の窓　足利の文化講演会　小さな窓から　野にある花　眠っている古新聞　出版機構の中で　出版雑誌界展望・一九六八年　責任　形の大きさ　夜空の花火　鯉のぼりと乱れ箱　盆踊りの思い出　幻灯　ほんのちょっとしたこと　このごろ私の愛好品　人命尊重　まごころの味　東京のそば・京都のそば

九月『日本近代文学大系８　樋口一葉集』解説・注釈　角川書店刊。

十一月「寝くたびれ」（『小説現代』）発表。

十二月『筑摩書房の三十年』筑摩書房刊。

〔昭和四十六年・一九七一年〕　六十五歳

三月『火の車』（短篇小説集）講談社刊。

（所収作品）狂い咲き　蛍とぶ肌　そんな形で　あの人　逢いびき　ひなどり弁天　寝くたびれ　火の車

〈装幀＝川口幹〉

三月「はの字忘れて」（『小説現代』）発表。

五月「『大衆文学大系１　尾崎紅葉・徳富蘆花・小栗風葉・泉鏡花』

解説」（講談社刊・所収）
六月「『大衆文学大系2　小杉天外・菊池幽芳・黒岩涙香・押川春浪』解説」（講談社刊・所収）
「永井荷風」（『太陽』発表）
七月「『大衆文学大系3　村井弦斎・村上浪六・塚原渋柿園・碧瑠璃園・大倉桃郎』解説・年譜」（講談社刊・所収）
八月～十二月「展望〈文壇〉」（『小説新潮』）連載。
九月「女郎星」（『小説現代』）発表。
「『新潮日本文学23　林芙美子集』解説」
「一葉・蘆花・独歩」（大岡昇平と対談・『対談日本の文学』中央公論社刊・所収）
十月「『大衆文学大系6　岡本綺堂・菊池寛・久米正雄』解説」（講談社刊・所収）
「菊池寛・久米八雄年譜」（同右）
十一月「猪場毅のこと―樋口一葉展にちなんで―」（『日本近代文学館』）発表。
十一月十九日「新しい一葉像」（『日本経済新聞』）発表。

〔昭和四十七年・一九七二年〕　六十六歳

一月「『大衆文学大系10　田中貢太郎・正木不如丘』解説・年譜」（尾崎秀樹と・講談社刊・所収）
「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
二月「女流作家の思い出」（芝木好子と対談『風景』）
三月「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
四月「女の匂う家」（『小説新潮』）発表。
「平林たい子小論」（『新潮』）発表。
「四の春」（『北の話』）発表。
五月「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
「樋口一葉伝」（『現代日本文学大系5　樋口一葉集・明治女流文学・泉鏡花集』筑摩書房刊・所収）
『樋口一葉』（講談社現代新書）講談社刊。
『明治文学全集30　樋口一葉集』（編）筑摩書房刊。
六月「置き手紙」（『小説現代』）発表。
「小説・七時〇三分」（『中央評論・白門文芸特集』）発表。
「浮気封じ」（『週刊小説』）発表。
「対談・秋声を追って」（野口富士男著『徳田秋声ノート』・中央大学出版部刊・所収）
「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
八月「『大衆文学大系17　佐藤紅緑・中村武羅夫・加藤武夫』解説」（講談社刊・所収）
「アキアジシリッポ」（『北の話』）発表。
九月「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
十一月「男の着道楽」（『別冊小説現代』）発表。
「文壇情報」（『小説新潮』）発表。
十二月「シルク・ペーパー」（『小説サンデー毎日』）発表。

「『大衆文学大系20　長田幹彦・吉屋信子・小島政二郎・竹田敏彦』解説」（講談社刊・所収）

〔昭和四十八年・一九七三年〕　六十七歳

二月「『大衆文学大系22　佐々木邦・獅子文六』解説」（講談社刊・所収）

三月「『大衆文学大系23』の『藤沢恒夫』解説」（尾崎秀樹と・講談社刊・所収）

「近代小説の祖樋口一葉」（丸谷才一・山崎正和との座談会・『歴史と人物』所収）

四月「靴をぬがせるとき」（『風景』）発表。

「傷だらけの顔」（『小説新潮』）発表。

「どっちがどっち」（『小説現代』）発表。

五月「大衆文学の動向」（尾崎秀樹と対談・『風景』）

六月「記憶の底」（『中央評論』別冊文芸特集Ⅱ）発表。

「『回想の壺井栄』の中の一文」（壺井繁治・戌居仁平編・青磁社刊）

六月五日「飼犬の死から」（『高知新聞』）発表。

七月　平林たい子の追悼文（平林たい子記念会編『平林たい子追悼文集』所収）

八月「雀色の空」（『うえの』）発表。

「『眼中の人』について」（『現代日本文学大系45』・筑摩書房刊・所収）発表。

九月十四日「裸女ふたり」（『週刊小説』）発表。

十月「『大衆文学大系30　短篇集(下)』解説」（講談社刊・所収）

十月三十一日「五十年ぶりの帰郷」（『北海道新聞』）発表。

十二月「『新潮日本文学38　幸田文集』解説」

〔昭和四十九年・一九七四年〕　六十八歳

一月『ひとすじの心』毎日新聞社刊。

三月『樋口一葉全集・第一巻』（塩田良平・樋口悦と共編・続巻同じ）筑摩書房刊。

四月「厄落し」（『季刊芸術』）発表。

「鼎談・樋口一葉をめぐって」（芝木好子・野口碩と・『ちくま』）

六月「接木の台」（『風景』）発表。

「芙美子とその時代」（『現代日本文学アルバム・第十三巻』学習研究社刊・所収）

八月「順番がくるまで」（『新潮』）発表。

九月「生き延びて」（『文芸』）発表。

「接木の台』河出書房新社刊。（この短篇小説集により第二十六回読売文学賞受賞）。

（所収作品）厄落し　女の匂う家　靴をぬがせるとき　傷だらけの顔　記憶の底　どっちがどっち　接木の台　生き延びて

〈装幀＝仲田好江〉

『樋口一葉全集・第二巻』（共編）筑摩書房刊。

十月「『綴り方』から『削り方』へ」（『文芸』）発表。

「井上隆晴の聞き書きに就いて」（『現代作家・作品論』・瀬沼茂樹古稀記念論文刊行会刊・所収）

十一月「好みの弁当」（『文学界』）発表。

「小さな店主」〈リレー―随筆―私の生まれた家―〉（『小説現代』）発表。

〔昭和五十年・一九七五年〕　六十九歳

一月「抱寝」（『文芸』）発表。

一月～三月「読書鼎談」（阿部昭・佐伯彰一と・『文芸』）

二月「囃し詞」（『海』）発表。

四月「幼なじみ」（『群像』）発表。

「作家訪問記―和田芳恵」（『海』）掲載。

五月「猫もいる風景」（『新潮』）発表。

「接木の台」（日本文芸家協会編『文学１９７５』・講談社刊・所収）発表。

六月「老木の花」（『文学界』）発表。

「母の寝言」（『別冊文芸春秋』）発表。

七月「或物語の発端」（『季刊芸術』）発表。

八月「近頃のこと」（『青春と読書』）発表。

「『馬は丸顔』書評」（平山三郎編『回想内田百聞』・弘前津軽書房刊・所収）

九月『抱寝』（短篇小説集）没出書房新社刊。

（所収作品）好みの弁当　抱寝　囃し詞　幼なじみ　猫もいる風景　老木の花　母の寝言　或物語の発端

十月（～五十二年一月）「暗い流れ」（『文芸』）連載。

「丹羽さんのあれこれ」（『丹羽文雄文学全集月報18』講談社刊・所収）発表

〔昭和五十一年・一九七六年〕　七十歳

三月「女流作家の思い出」（芝木好子と対談・野口富士男編『座談会昭和文壇史』講談社刊・所収）

「大衆文学の動向」（尾崎秀樹と対談・同右書所収）

四月「樋口一葉のことば」（『ちくま』）発表。

五月「抱寝」（日本文芸家協会編『文学１９７６』講談社刊・所収）

六月「落葉のように」（『別冊文芸春秋』）発表。

七月「月は東に」（『季刊芸術』）発表。

『自選和田芳恵短篇小説全集』河出書房新社刊。

（所収作品）道祖神幕　暗い血　強い女　塵の中　掌の恋　冬の声　きれいな嘘　おまんが紅　色合わせ　遠い眺め　お人好し　窮鳥　狂い咲き　あの人　逢いびき　火の車　厄落とし　記憶の底　接木の台　生き延びて　好みの弁当　抱寝　囃し詞　幼なじみ　猫もいる風景　老木の花　母の寝言

〈付録＝吉行淳之介「和田芳恵氏の本領」・丸谷才一「馬小屋の闇」・「年譜和田芳恵」〉

『正岡容集覧』監修（金子光晴・富士見晴と）仮面社刊。

九月『平林枚たい子全集』（編修委員　円地文字・今日出海・佐伯彰

一・丹羽文雄・平野謙・山本健吉らと）昭和五十四年九月刊行了・潮出版社刊。

十二月「日なたぼこ」（『海』）発表。

『樋口一葉全集・第三巻上』（共編）筑摩書房刊。

〔昭和五十二年・一九七七年〕　七十一歳

二月「雪女」（『文学界』）発表。

「通勤電車の中で」（『文芸春秋』）発表。

「はやりの袢纏」（『文芸』）発表。

二月二十五日「小説と事実」（『北海道新聞』）発表。

四月「雀いろの空」（『海』）発表。

『暗い流れ』河出書房新社刊。

〈装幀＝多田進〉

四月～六月「読書鼎談」（阿部昭・上田三四二と『文芸』）

五月『暗い流れ』により第九回日本文学大賞受賞（新潮社）。

『限定版・道祖神幕』大西書店刊。

（所収作品）道祖神幕　おまんが紅　接木の台　抱寝　生き延びて

〈装幀・挿画＝斎藤真一〉

六月「お弘」（連作「逢いたいひと」の一編・『別冊文芸春秋』）発表。

「砂の音」（『すばる』）発表。

『限定特装版・暗い流れ』（日本文学大賞受賞記念・非売品）河出書房新社刊。

七月「巣箱」（『海』）発表。

「落葉のように」（日本文芸家協会編『現代小説'76』角川書店刊・所収）発表。

八月「はん子」（連作「逢いたいひと」の一編・『文学界』）発表。

「同じ屋根の下で」（『文芸』）発表。

八月九日～三十日「自伝抄――七十にして、新人」（『読売新聞』夕刊）連載発表。

十月「けい子」（連作「逢いたいひと」の一編『文学界』）発表。

十月五日　東京都大田区上池台一の二九の八の自宅で十二指腸潰瘍で死去。

十二日　筑地本願寺で葬儀・告別式。喪主和田静子夫人・葬儀委員長丹羽文雄。

十一月『自伝抄』（付弔辞・葬儀委員長挨拶　和田静子刊）

十一月『武田麟太郎全集』（編纂　薬師寺章明と）新潮社刊。

〔昭和五十三年・一九七八年〕

一月　随筆集『順番が来るまで』北洋社刊。

〈「あとがき」和田静子　装幀＝岡鹿之助〉

「面と文学」「一葉の年譜」（『現代文学大系3　幸田露伴・樋口一葉集』筑摩書房刊・所収）

四月『雀いろの空』中央公論社刊。

（所収作品）落葉のように　月は東に　日なたぼこ　通勤電車の中で　雀いろの空　砂の音　巣箱　同じ屋根の下で

〈装幀＝岡鹿之助〉

『作家のうしろ姿』毎日新聞社刊。

（所収評論・随想等）小説・武田麟太郎　作家子供―菊池寛のこと　林芙美子・出生の謎　永井荷風　人間吉川英治　戦時下の売れっ子火野葦平　小説・志賀直哉　死について―川端康成　明治維新のすぐれた書き手　吉屋信子さんを悼む　恋と歌に生きた女性たち　私の見た作家たち

「雪女」（『文学１９７８』講談社刊・所収）　第五回川端康成文学賞受賞

「七十にして、新人」（『白伝抄Ⅳ』読売新聞社刊・所収）

六月「雪女」（『新潮』）掲載。

『雪女』文芸春秋社刊。

（所収作品）逢いたいひと―「お弘」「はん子」「けい子」　雪女

自伝抄

〈付＝「星に望をつないで」和田静子　装幀＝池田憲二〉

「お弘」（『現代小説'77』角川書店刊・所収）

十月『和田芳恵全集　第三巻　長篇小説』河出書房新社刊。（全集の編集協力は野口富士男）

（所収作品）塵の中　暗い流れ

〈作品解題＝保昌正夫〉

十一月『和田芳恵全集　第四巻　一葉研究』河出書房新社刊。

（所収作品）樋口一葉　一葉の日記

〈作品解題＝保昌正夫〉

『樋口一葉全集　第三巻(下)』（共編）筑摩書房刊。

〔昭和五十四年・一九七九年〕

一月　随筆集『ひとすじの心』毎日新聞社刊。

〈装幀＝栃折久美子　あとがき＝和田静子〉

『現代文学大系61　井上友一郎・檀一雄・和田芳恵集』筑摩書房刊。

（所収作品）塵の中　色合わせ　厄落とし　接木の台　生き延びて　抱寝　幼なじみ　雪女

三月『和田芳恵全集　第一巻　短篇小説Ⅰ』河出書房新社刊。

（所収作品）道祖神幕　暗い血　強い女　掌の恋　冬の声　きれいな嘘　おまんが紅　色合わせ　遠い眺め　お人好し　窮鳥　狂い咲き　あの人　逢いびき

〈作品解題＝保昌正夫〉

四月『和田芳恵全集　第二巻　短篇小説Ⅱ』河出書房新社刊。

（所収作品）厄落とし　記憶の底　接木の台　生き延びて　好みの弁当　抱寝　囃し詞　幼なじみ　猫もいる風景　老木の花　母の寝言　落葉のように　月は東に　日なたぼこ　通勤電車の中で　雀いろの空　砂の音　巣箱　同じ屋根の下で　逢いたいひと（お弘・はん子・けい子）　雪女

〈作品解題＝保昌正夫〉

五月『和田芳恵全集　第五巻　随筆』河出書房新社刊。

（所収作品）ひとつの文壇史　白伝抄　永井荷風　一葉と母の香典帳　愛の歪み　紅葉と一葉　消え残る色気　心の灯　秋声入門　林芙美子の一面　「深淵」の顛末　職人の世界　秋と女ごころ　現代女性気質　ビヤボンと月は東に　母の生き方　金から女へ　自分のこと　銀座夜話　秋がたつ頃　筆名考　形の大きさ　夜空の花火　鯉のぼりと乱れ箱　幻灯　このごろ　小さな店主　十四の春　古停車場の思い出　アキアジシリッポ　旅まわりの子役　樋口一葉のことば　はやりの袢纏　「綴り方」から「削り方」へ　小説と事実

〈作品解題・和田芳恵年譜＝保昌正夫〉

七月『接木の台』（集英社文庫）

（所収作品）厄落とし　女の匂う家　靴をぬがせるとき　傷だらけの顔　記憶の底　どっちがどっち　接木の台　生き延びて　好みの弁当　抱寝　囃し詞　幼なじみ　猫もいる風景　老木の花　母の寝言

〈解説＝野口富士男　カバー＝三村淳〉

〔昭和五十五年・一九八〇年〕

二月『小説みだれ髪』光風社出版・再刊。

〈解説＝野口富士男〉

四月「大衆文学通史・現代小説」（『大衆文学大系・別巻』所収。岡保生と分担執筆。講談社刊）

十一月『暗い流れ』（集英社文庫）

〈解説＝八木義徳〉

〔昭和五十六年・一九八一年〕

一月「暗い流れ」「雪女」（『北海道文学全集・第十三巻』所収。立風書房刊）

十一月「小さな足あと」（『北海道文学全集・別巻』所収。立風書房刊）

十二月『樋口一葉全集・第四巻』（共編）筑摩書房刊。

〔昭和五十七年・一九八二年〕

五月「『日本近代文学名著事典』（日本近代文学館）」執筆。

〔昭和五十八年・一九八三年〕

一月『一葉の日記』（文芸選書）福武書店刊。（筑摩書房版・新潮文庫版〈『樋口一葉伝』と改題〉の再刊）

〈解説＝竹西寛子〉

〔昭和六十一年・一九八六年〕

三月『一葉の日記』（福武文庫）

〈補注＝野口碩　解説＝竹西寛子〉

（昭和六十二年九月作製）